

論 説

女性クリエイターの観光に対する行動と捉え方
—さくらももこ「ちびまる子ちゃん」を事例として—

友原 嘉彦*

＜要 旨＞

本研究はさくらももこの代表作「ちびまる子ちゃん」を通して、女性クリエイターの観光に対する行動と捉え方を考察したものである。さくらの幼少期を投影したキャラクターであるまる子がタイの南の島に滞在した話を掘り下げて確認することで、さくらが観光活動においてどのように振る舞い、また、観光をどのように捉えているのかが明らかになった。まる子はプサディーという地元の子と懇意になることでタイの南の島が自分と密接に関係する地域となり、継続的に関わっていきたい対象である「サードエリア」となった。女性クリエイターさくらももこの観光は第一義的に『『サードエリア』の構築活動』であることが示された。

キーワード：女性クリエイター、観光、さくらももこ、「ちびまる子ちゃん」、「サードエリア」

1. 序論

1-1. 研究目的

リベラルにリキッド化する後期近代において、観光の形態も個々人の趣味や世界観によってさまざまなバリエーションが認められるようになった。こうした各種の「XX ツーリズム」について、観光庁は2008年の発足以来、それらを「ニューツーリズム」としてまとめ、促進に注力してきたが、2016年にはこれを「テーマ別観光による地方誘客事業」と捉え直して推進している。

このような観光を取り巻く時代の移り変わりの中で、2010年頃より急速に存在感を増してきたのが女性である。友原（2017）編著の『女性とツーリズム 観光を通して考える女性の人生』においても観光者、観光の受け入れ側ともに女性の存在が高まっていることが確認できる。この書籍の中で、友原は観光をリードする若年女性に着目し、とりわけ、情報の発信力が高く、社会に影響力を持つ高学歴層についてフォーカスを当てて示した。そうした中で、さらに観光の最先端を考える際には進取の気性や創造性といった観点からリベラルでクリエイティブな層が特に注目できるだろう。こうした存在を本稿では女性クリエイターという語にまとめる。

本稿ではこの女性クリエイターにおける観光の特徴を探ることとするが、事例として、マンガ、アニメの脚本、イラスト、絵本、エッセイ、詩、作詞、作曲、雑誌の編集など、芸術にかかる多岐に渡った領域で能力を発揮し、後期近代の社会に大きな影響力を与えてきたさくらももこ（1965-2018）を取り上げる。

書物に見るさくらの観光は取材を兼ねたものがほとんどで、その際には出版社の担当社員やカメラマン、秘書的な役割を担っている自社（さくらプロダクション）の社員らが同行している。こうした職業柄の出張・グループ観光ではなく、後期近代の晩婚化、非婚化、少子化の中ではプライベートな観光について特徴を検討する意義があろう。こうした趣旨から、本稿ではさくらの代表作であるマンガ「ちびまる子ちゃん」を扱う。主人公であるまる子はさくらが小学3年生のときの自身を投影したキャラクターである。そのまる子をどのように観光させるのか。そこからはさくらがプライベートであればどのように観光するか、観光をどのように捉えているか、ということが見て取れるだろう。

1-2. 先行研究

前節のように、友原（2017）は女性の文化資本に注目して観光における研究を行なったが、このように直

* 西南女学院大学人文学部観光文化学科

接的でなくとも、高学歴、リベラルな女性の観光研究はなされている。茨木（2017）はこうした女性の観光現場での着眼点についてパリを事例として研究した。高田（2017）は文学作品を対象として女性の観光の心理や行動を捉えた。これらの研究を通して、高い文化資本を有する女性の観光の一端は明らかになっている。友原（2017）は海外一人旅の女性における文化資本の高さを、茨木（2017）は観光の現場で生活を見る高文化資本の女性を、高田（2017）は高文化資本層であっても「女子会」（とりとめのないおしゃべり）の延長のような旅を送る女性を、それぞれ示した。

このほか女性、特に海外渡航も含めて需要が大きい相対的に若い年代の観光に注目した研究が近年積み上がってきている。たとえば齋藤、相、東（2017）は「女子旅」において、年間の旅行回数や日数、旅費、情報源など多彩な項目についてウェブアンケートで明らかにした。高山（2018）は「女子旅ガイドブック」を通して「女子」のアジアへのまなざしについて研究を行った。このように、観光する「女子」、若年女性にかかる研究は年々蓄積を増してはいるが、友原（2015, 2017）が「国内女子旅」よりも「海外女子旅」、「海外女子旅」よりも「海外一人旅女子」において高学歴となっている傾向を示したように属性によって丁寧に見ていく必要、余地は未だ残っている。前節においても示したように、高学歴とも関係するが、さらにリベラルやクリエイティブといった要素が加わるとどうかという疑問が残る。そこで本研究の事例として取り上げるのがクリエイターとして著名なさくらである。

2018年8月まで存命であったさくらについての研究は、生前にはほとんど行なわれていない。これはさくら当人が文筆家であり、自身を発信する側であったことも強く相関するだろう。さくらの没後は研究が続けざまに挙がってきた。水引、歌川（2019）は「ちびまる子ちゃん」の登場人物を通して、友情におけるジェンダーの表象について論じた。信時（2019）はさくらの独創性と信念を貫き通す姿勢について、ほかのマンガ家と比較し、評価・検討を行なった。友原（2020）はさくらの出身地であり、自身の幼少期を描いた作品「ちびまる子ちゃん」の舞台でもある静岡県の清水の町において、さくらがどのように地域アイデンティティの役割を担い、また、偉人として観光資源の一翼を担っているのかについて論じた。さらに高等教育面においては、斉木（2019）が留学生教育の一環で、清水をさくらにかかる観点（特に代表作「ちびまる子ちゃん」）を通して理解、考察してもらう活動を行なっている。

このように、さくら没後の早い時点で複数の研究や教育活動報告が挙がっているが、さくらを女性クリエイターの代表例とし、そうした層における観光の理解を目的とした研究は存在していない状況である。

1-3. 研究方法

研究目的に則り、本研究ではさくらの作品「ちびまる子ちゃん」の中から女性の一人旅の展開を示した「まるちゃん 南の島へ行くの巻」（本稿では『ちびまる子ちゃん③』2018を参照。初刊は1990）を事例として取り上げ、描写について丁寧に分析・検討する。さらにその後、36話目に位置するこの話が「ちびまる子ちゃん」作品全体の中でどのように位置付けられているのかを確認する。そのため、さくら自身の評価はもとより、インターネットサイトを通して読者とメディアの両サイドがどのように評価し、取り扱っているのかを示す。このように描写分析と社会へのインパクトの分析という両面から本研究目的を明らかにする。

1-4. 研究対象作品のあらすじ

「まるちゃん 南の島へ行くの巻」は前編と後編から構成されている。

商店街の福引で10日間の（タイにある）南の島ツアーを当てたまる子の祖父。家族の誰もが都合が悪く、行けない中、まる子が行くことになる。

商店街主催のツアーであり、機内や船内、現地のバンガローで大人や中学生と交流し、旅行に慣れていく。島での歓迎会でまる子は自身と同年くらいの現地の少女（プサディー）と知り合う。ここまでが前編である。

後編はプサディーと一緒に楽しく過ごすまる子が描かれる。ある日、島に近接する無人島と思われる離れ小島に渡る。まる子はプサディーの案内の下で果物を取りに行く。洞窟に入り、その水流に飛び込む2人。流されて別の場所へ出、そこでさらに、細く柔軟な木の枝を掴んで飛ぶと、着地点には果物がたくさんなっている木があった。

その後、野ウサギの母子を見たり、トロツクに乗ったりする2人。最後の夜は2人で満天の星空を見た。島を出発する日、プサディーは民族衣装を着て、まる子と別れる。これが研究対象作品のあらすじである。

2. 「まるちゃん 南の島へ行くの巻」に見る女性クリエイターの観光

2-1. 作品前編

家族が了承し、商店街のツアーとはいえ、知り合いのいない中、1人南の島に行くことになったまる子。南の島行きが決まってから出発まで一週間あったが、その間、まる子は家族一人一人にお土産の希望を尋ねたり (pp.90-91. 該当ページは、さくらももこ『ちびまる子ちゃん③』2018 による。以下同)、母にサングラスやビキニ、日焼け止めクリームを買ってもらおうようねだったり (p.91) して過ごした。これらの言動からはさくらが旅行前、旅行中のショッピングを重要な楽しみにし、瑕疵なく万全の態勢で臨もうとしていることがわかる。お土産については後編にも家族に渡す場面として1ページ使っている (p.124)。お土産を「なんでもいい」と言った祖父には民俗色豊かなお面を買ってきたまる子。また、旅行前にねだったサングラス等はいずれもファッションに關係する物である。旅行にかかるさくらのファッションに対する意識の高さが見て取れる。

出発の日空港における両親の見送りの場面から描かれている。出発ゲートから飛行機に向かうまる子。ここから知り合いのいない10日間が始まる。まる子は機中で隣席の中年男性 A と、バンコクに着陸後のタラップでは青年男性と、イミグレーション前では中年男性 B と、島に行くために乗船した甲板では中学生の女子と、それぞれ話し、知り合いになる (pp.94-99)。中年男性 A とは通路側の席の彼がまる子にジュースを渡したことがきっかけであり、中年男性 B にはまる子が「これからどうするんですか」と話しかけた。一方、青年男性と中学生の女子はまる子が独り言を言っているのを見て話しかけてきた。いずれも商店街ツアーのメンバーではあるが、続けざまにいろいろな人と知り合うまる子。さくらの旅行はさまざまな人との交流が念頭にあることを窺わせる。

島に着くと、まずはバンガローに通された。まる子は中学生の男子2人と同室になる。まる子は「ガン」とショックを受け、一筋の汗をかき、「こんな人達といっしょの部屋なんて…」と心の中で思うが、特に強くは嫌がらず、受け入れている (p.101)。性別によってさまざまなことを分離することが多い日本において、さくらは性別をとりたてて気にせず、人として見るというリベラルな人格であることがわかる場面である¹⁾。

その後、歓迎会があり、まる子は島の受け入れ側男性の娘であるプサディーと仲良くなる。年齢もまる子

と同じくらいであり、両者ともに初対面で笑顔を送ったため、接近することになった (pp.102-103)。さくらは後編で2人を遊ばせ、長きに渡る友人とする (3章1節で詳述)。さくらの外国旅行を通して知り合った現地の友人を大切に作る姿勢²⁾ は本作品を通して明らかである。

2-2. 作品後編

後編はまる子が南の島へ来て5日目、プサディーから地元の踊りを教えてもらっている場面から始まる (pp.105-107)。観光では何か有名な場所に立つことよりも、こうした人との交流を通じた体験をさくらは提示している³⁾。

次にまる子たちに合流した中学生女子も合わせ、島に近接する離れ小島に渡ろうとする場面へ移る。離れ小島には手漕ぎボートで行くことになるのだが、この漕ぎ手の手配をまる子はかつてでた (バンガローで同室の中学生男子2人を連れてくる)。これもさくらの観光に特徴的で、誰かに何かの役割を振る行為はほかの作品においても随所で見られる⁴⁾。人が任せられた役割を果たすことで、より素晴らしいことになることをさくらは示している。

離れ小島で、中学生男子2人は魚を釣ってき、中学生女子は炊飯をするという役割を担う中、まる子とプサディーは果物を採ってくることになる。果物を採りに行く途中、まる子はプサディーに虫除けスプレーを噴いてあげる (p.110)。さらに (水に入って濡れ落ちてしまったため) p.113においても同様に噴いてあげるコマがある。これらの行為からも前節で述べたように、瑕疵なく、万全の態勢で観光を行なうということと、素肌ではあるが広義のファッションを重視するという、さくらの観光行動が見て取れる。

この後、離れ小島の事情を知るプサディーの先導の下、まる子は洞窟に入り (p.110)、さらに洞窟を流れる水路に飛び込む (p.111)。これらの場面、まる子は「こわいよォ だいじょうぶかなァ」などと躊躇するが、「ダイジョーブ」として先導するプサディーを信じてついていく。水路は (果物の生る場所へと通じる) 別の浜に繋がっており、水面から顔を出してそれがわかったまる子は「スゴイっスゴイね プサディー

きょうは 大冒険だねっ」ととても興奮し、喜ぶ (p.112)。さくらはほかの作品でも、旅先での何か新しいことについて、当初案じる言動を見せるが、同行者を信じ、やってみる、といったことを多く描写し、さらにそれが感動に繋がることも多い⁵⁾。さくらの観光

における、大丈夫か検討することからの、同行者を信じてやってみるという流れからは、安全への検討と、何かおもしろい良い経験ができるかもしれないという好奇心が短時間のうちに順を追ってくるという形式が読み取れる。

さらに漂着点に生えていた細く柔軟な木の枝を掴んで飛ぶまる子たち（まる子はここでも「だいじょうぶかなァ このヒモ……」と当初躊躇する。p.113）。着地点には果物がたくさんなっている木があった。まる子たちはそこで野ウサギの母子も目にする。まる子はプサディーに「うれしい」、「よかった」と言い、心の中で「プサディー …………… プサディーは わたしが 学校にいったり たまちゃんちにいったり おかあさんに おこられたり テレビみたりしてる時も いつも この島で こんなふう に 暮らしているんだね ちっとも しらなかったよ プサディー ……………」とつぶやく (pp.115-116)。仲良くなり、友達になったプサディーと「大冒険」したことによって、タイの南の島が急速に自分事、自分と比較して考える対象になった。さくらは行ったことがあり、感動したところが災害などに見舞われた際にはとても心配になる⁶⁾。人生というスパンでの「サードエリア」⁷⁾の重要性についてまる子を通して描いたと言える。

たくさんの果物を得たまる子とプサディーはトロココで斜面を降り、中学生3人のいるところに向かった。5人は「おいしい」と言いながら果物を食べるが、まる子は男子中学生2人に「ちょっと あんたたち なにか芸でも やって ちょうだいよ」と話しかける。断られると、「しかたないねェ じゃあ まる子が どどいつでも やるか」と言い、都都逸を始めた (pp.117-118)。この場面は結局盛り上がりなかったが、前節や本節初頭でも言及したように、さくらは旅先の人が集まった場で交流をなるべく盛り上げようと試みていることが示唆される。

そして、最終日前日の夜。まる子はプサディーに誘われ、星がきれいに見える場所へ連れて行かれた。まる子とプサディーは手を繋ぎ、満点の星空を眺める。その際、まる子は「プサディーも わたしも 地球にいるね 地球にいるから また会えるね ね……」と心の中で思う。このシーンはp.119の上から3コマ連続で見せている。その3コマはこのシーンの角度や遠近を変えたものであるが、それらのページに占める割合は72%⁸⁾とシーン別で本作品中最大である。さくらがこの南の島をまる子の「サードエリア」とした1つめの決定的な描写である。

最終日、プサディーは地元の伝統衣装を着てまる子を見送る。クリエイターであるさくらはその土地その土地の伝統的なデザインに好意を寄せており⁹⁾、この日にプサディーに着せたのであろう。なお、プサディーは泣き出してしまうが、まる子はこの場面では泣かなかった (pp.120-121)。

まる子たち清水の商店街ツアーの客は飛行機に乗り、タイを発つ。機内でまる子はプサディーにももらった人形に手紙がついていることを見つける。それは「マるこ、ワスレ、ナイで。プサディ」と書いてあった。ここでまる子と一緒に地元の踊りを踊った時のこと、離れ小島を散策したこと、そこで水路に飛び込んだこと、満点の星空を見たことを次々に思い出し、号泣する。さくらは、感性の合うせつかくの友達と別れるときの子ども心をそのように描写した。この場面でまる子は心の中で「わすれるわけ ないよ あんな 大冒険したん だよ わすれ られないよ… プサディー バイバイ」と呟く。忘れない旨が2回続いている。さくらはプサディーの暮らすこの南の島をまる子の「サードエリア」とした2つめの描写であることが読み取れる (p.123)。

帰国後、まる子が家族にお土産を渡す場面が最終ページである (p.124)。家族の最後におじいちゃんにタイの民俗感溢れるお面を渡し、おじいちゃんが戸惑う場面でマンガならではのウケを取っている。そして最終コマはまる子とプサディーと一緒に撮った写真で締め括られている。

3. 「まるちゃん 南の島へ行くの巻」の「ちびまる子ちゃん」作品全体における位置付けと評価

3-1. 「ちびまる子ちゃん」作品全体における位置付け

本章では「まるちゃん 南の島へ行くの巻」が「ちびまる子ちゃん」作品全体の中でどのように位置付けられ、また、どのような評価がなされているのかについて探る。まずは、前者について検討したい。

「まるちゃん 南の島へ行くの巻」以後、最初にこの話にかかる内容が登場するのは12話後の「まる子 南の島のおみやげ分配に困るの巻」(1991)である。この話はタイトル通り、まる子が南の島で買ったお土産をクラスメイトに配る際、数が足りないことに気付く、どのように分配しようかという内容である。第2章第1節で触れたように、お土産を配るという行

為を非常に重視しているさくらの意識がこの話からも読み取れる。

この話の扉絵は南の島においてハンモックでくつろぐまる子が描かれ、『ちびまる子ちゃん④』2018を参照。以下同じく、この話についてはこれを参照する。p.76)、次のp.77はプサディーが泣きながらまる子と別れるコマから始まる。同ページの2コマ目はプサディーと遊ぶまる子が描かれ、同3コマ目は帰りの機内でプサディーの手紙を読んで泣くまる子が描かれている。「まるちゃん 南の島へ行くの巻」を読者に思い出させる作りとなっている。

その後、pp.81-82ではおじいちゃんがもらったお面でまる子を驚かせる場面がある。p.86ではプサディーからもらった人形を飾り、窓を開けて夜空を見ながらプサディーを思い浮かべる描写がある。お土産を配るという、さくらの中での重要な行為をテーマにした作品というだけでなく、タイの南の島、そしてプサディーを回想シーンとはいえ登場させたことはさらに次に「まるちゃん 南の島へ行くの巻」に関係する話への布石となり、作品全体の中で、これを1話挟んだ意義は大きい。

次に「まるちゃん 南の島へ行くの巻」に関係する話は47話後の「ちびまる子ちゃん 100回記念の巻」(1995)である。なお、これが「ちびまる子ちゃん」作品において「まるちゃん 南の島へ行くの巻」が関係する最後の話である。

この話はマンガ「ちびまる子ちゃん」が100回目となる記念に、大型ホテルでパーティーが催され、そこに作品の登場人物が集い、お祝いするという内容である。

この話の中で、まる子は壇上で司会者より「一番印象に残った思い出は何ですか? 楽しかったことでも 悲しかったことでもいいですよ」と質問される(『ちびまる子ちゃん⑨』2018を参照。以下同じく、この話についてはこれを参照する。p.17)。まる子は一瞬考えた後、「夏休みに南の島へ 行って大冒険した ことが 一番印象に 残っています」、「その島で プサディという 女の子と 出会いました……」、「もう 会えない 友達だけど 私 プサディのこと 一生忘れません」¹⁰⁾と述べた。

このように、さくらは100回の連載の中で「一番印象に残った思い出」として、「まるちゃん 南の島へ行くの巻」を挙げた。もちろん、小学3年生であるまる子にはそれほど派手なエピソードがあるわけではない。海外に行ったことが真っ先に挙がっても不自然で

はないだろう。しかし、司会者は先の質問の前に、まる子に「うれしかった思い出」と「困った思い出」をそれぞれ訊いている(pp.16-17)。まる子はそれらに対し、人気歌手のコンサートに行ったこと(前者)と親友のクラスメイトとケンカしたこと(後者)を挙げているのだが、これらはシャッフル可能な話である。つまり、「うれしかった」を「南の島」として、「一番印象に残った」を「コンサート」としたり、「困った」を(プサディーと別れるのがつらかったため)「南の島」として、「一番印象に残った」を「親友のクラスメイトとケンカしたが仲直りできた」としたりしても論理的に成り立つ。しかし、さくらはそうしなかった。海外の旅、「サードエリア」の構築を何より一番に持ってきたのだ。

まる子はその後、同パーティーのサプライズでプサディーと再会する(pp.19-20)。2人は手を取り合って再会を喜び、まる子はこのサプライズに「最高です」と述べた。

この話以降、マンガ「ちびまる子ちゃん」は30話続くが、「まるちゃん 南の島へ行くの巻」にかかる話は登場しない。しかし、全130話の中の100話目までで「一番印象に残った思い出」とされているのが、「まるちゃん 南の島へ行くの巻」である。さくらは自身の分身であるまる子に対し、前掲の注釈2におけるバリ島のアリミニ氏のようにタイの南の島とプサディーの存在をあてがっていたのではないだろうか。

3-2. 「ちびまる子ちゃん」作品全体における評価

この節ではインターネット上における読者の評価をまずは示し、言説を分析したい。

凸版印刷グループの電子書店であるBookLive!のレビューでは「まるちゃんが南の島へ行く回は名作!」(みや、2019年12月25日)、『まるちゃん南の島に行く』。プサディーとまるちゃんの楽しくて幸せで切ない夏の思い出、懐かしい。言葉は通じなくても、子供だからより伝わる心と心の交流があったかくていいなあ」(Posted by ブクログ、2013年11月27日)、「やっぱりこの巻(友原注:コミックス『ちびまる子ちゃん』第6巻)といえば『まるちゃん南の島へ行く』でしょ!南の島で出会ったプサディーとのわくわくはらはらの大冒険と友情の物語。最後のお別れの場面が感動的です」(Posted by ブクログ、2009年10月4日)とある。また、学習塾経営者が書いているというブログ「じゅくせんのつぶやき」では、「(友原注:アニメ「ちびまる子ちゃん」で) ☆1 一番印象に残っているのは『まる

ちゃん南の島へ行く』の回（第31話、第32話）だ。改めて観た。やはり泣ける。☆商店街の福引に当たって、まるちゃんが南の島に行くという話だった。そこで出会った女の子との友情。日本に帰るため飛行機から小さくなる島を眺めて号泣するまるちゃん。思わずもらい泣きしてしまった。☆おじいちゃんへのお土産には笑った」（『まるちゃん南の島へ行く』を見て涙、2018年8月28日）と記述されている。

これら読者、視聴者の感想からは「まるちゃん 南の島へ行くの巻」が少なからず高い評価を得ていることがわかる。内容としては「プサディーとの友情」を評価しているものが多い。しかし、すでに述べたように、まる子にはクラスメイトに親友がいる。そのこととの違いは「旅先での友情」にあるだろう。また、「大冒険」を評価しているものもある。確かに「ちびまる子ちゃん」においてはほとんどが清水（日常生活圏）の中で完結する。心の機微を示した話が中心であり、冒険的要素は少ない。その点で、この話は舞台が海外と異色であり、さらに大自然の中を進んで行くという描写で、冒険的な要素を強く示している。この点も読者に大きなインパクトを残したものとなったであろう。

メディアサイドの評価はどうであろうか。DVDで販売されているアニメ「ちびまる子ちゃん全集1990」の4本目は18の話が収録されているが、このDVDのタイトルは『まるちゃん 南の島へ行く』の巻である。また、表紙はプサディーが単独で飾っている。インターネットプラットフォームamazonの「説明」では、「本作は（中略）『まるちゃん南の島へ行く』のほか、『プールびらき』『七夕の願い事』『まるちゃんは夏休みも学校に通う』など全18話を収録」（キネマ旬報社データベース）、『まるちゃん 南の島へ行く』の巻収録（Oricon）というように、この4本目のDVD収録18話の中で代表する話として「まるちゃん 南の島へ行くの巻」を挙げている。

このように、作者のさくらのみならず、読者や視聴者、そしてメディアからも高評価を受けている話であることが示された。

4. 結論

本研究では、さくらもこのマンガ「ちびまる子ちゃん」を事例として、女性クリエイターの観光に対する行動と捉え方を考察した。とりわけ第36話「まるちゃん 南の島へ行くの巻」を通して、さくら自身の幼少

期を投影したキャラクターである、まる子をどのように旅させるのか、また、その旅をまる子はどう捉えていくのか、について明らかにした。

当初一人で海外ツアーに参加していたまる子の行動において、その特徴は次の①～④であることが示された。

- ①旅行前、旅行中において必要な買い物を行なう。旅行前は特に旅行中のファッションに対してであり、旅行中は家族や友人に配る物も含め、土産に対してである。旅行中、旅行後のことを見越した行動であると捉えることができる。
- ②旅行中に多様な人々と交流していることが示された。その際、一過性でない人に対しては、役割を与えている。各自が役割を担うことでスムーズになったり、場が盛り上がりやすくなるなど、良くなることを見込んでいる。
- ③何か新しいことに直面した際は、まず安全性について検討している。その過程を経て、実際に行なっている。新進性のある体験による感動を描いているが、安全性についても事前に検討していることがわかる。
- ④旅行先で出会った現地の人と懇意になることで、現地が自身の中で重要な地域「サードエリア」となり、自分事となっていく過程を描いている。

これら4つの特徴の中で、特に人生について重要なことは④であろう。①～③はどこででも可能であるが、④はそのときの運による。さくらはまる子にプサディーという気の合う人物を配した。プサディーと出会えたことで、この話が100話目までにおいて「一番印象に残った思い出」となった。100回記念パーティーにはプサディーが登場した。また、読者やメディアもプサディーとの友情をこの話の中心に据えている。

タイの南の島に行かなければ、この島は世界中の島の1つに過ぎなかった。まる子に向かわせるには、島はある程度の心を惹く要素がなければならない。しかし、行ってもプサディーと出会っていなければ、この島が自身の中で重要な存在に位置付けられることはなかったかもしれない。プサディーと出会ったことで、この島は「ある地域」や「行ったことのある地域」でなく、「心にとってかけがえのない地域」であり、継続的に関わって行きたい地域。サードエリア」と決定付けられたのである。

しかしこれも、①のように旅行の準備を整え、②の

ように人々と交流を行ない、③のように案じた上でやってみる、という動きがあつてのことである。

以上のように、女性クリエイターさくらももこにとって旅行は、第一義的には『サードエリア』の構築活動であることが示された。そこから、その時々によって、④が満たされるかどうかが決まる。満たされればそこは「サードエリア」となり、リピーターとなって継続的に地域に関わっていくことになる。地域の側も「サードエリア」とされることにメリットはあるが、訪問者側にとっても自身の中で「サードエリア」が(複数)あるか、ないか、という点は人生の豊かさにかかってくる。さくらは豊かな人生を送るにあたって「サードエリア」という資本をいくつか有しており、マンガ作品を通して、この重要性を読者に伝えている。

それは折しも昨今登場した概念である「多拠点生活」ともリンクする。国立情報学研究所の学術文献データベース CiNii Articles によると、「多拠点生活」をキーワードとする文献は2015年が初出である(1本)。以後、2019年に1本、2020年(8月22日現在)は3本となっており、まだ計5本ではあるが、近年注目の度合いが高まってきた。しかし、実際に多くの拠点で生活するのは容易なことではない。一方で、さくらが築いた「サードエリア」は「時々、しかし、継続的に訪れたい心の拠点をいくつか持つておく」という持続可能性に優れたものである。

今回の研究を踏まえた今後の課題としては、さくらの取材旅行における目的地決めや行動パターン、旅行中の着眼点についての整理と検討が必要だと認識している。こうした課題を明らかにすることで、クリエイターを始めとした観光をリードする文化資本の高い女性の出張や他者との同行旅行における志向について示したい。

注 釈

- 1) さくらのこの面はたとえば『さくらめーる』(2003)において、(息子がいるさくらに対し)「もう一人子供が欲しいですか? 女の子はいかがですか?」という読者の質問に「もう一人欲しいとは考えていませんが、いたらカワイイだろうなァとはとても思います。女の子でも男の子でも」と返しているところからも窺える(同書 pp.19-20)。
- 2) さくらの外国の友人は旅行を通して知り合った者も多い。たとえば、さくらが「バリに行くたびに彼女の家を訪れて

いる」(『焼きそばうえだ』2019、初刊は2006)という現地在住の女流画家アミニニ氏もその1人で、2004年のさくらのデビュー20周年を記念したリトグラフも同氏と合作している(『ももこタイムス』2005, pp.52-53)。

- 3) さくらはたとえば『富士山』シリーズ①～④(いずれも2000)の中で、旅先の人々の助力を借り、現地の衣装や関連するコスプレに身を包む「変身」を行なっている。
- 4) たとえば、バリに焼きそば屋を作るために行ったさくら達の話である『焼きそばうえだ』(2019)では、メンバーに対し、「植田さんの作ったお好み焼きはとてもおいしくて、(略)好評だった。(略)しかし考えてみれば、植田さんが役に立ったのは、このお好み焼きの件だけだったような気がする。あとは、別に邪魔にもなっていないが、何か役に立つような事は何もしていない」(p.114)としている。一方で、さくらは焼きそば屋のために手の込んだ看板2枚(うち1枚は両面)を描くという役を担った。このように、「役に立つ(かどうか)」というさくらの意識は観光の上でも提示されている。
- 5) 仲間と行なったクルージングで(免許のない中、)目的の島までクルーザーの運転を任されたさくら(『富士山 第④号』2000)。「私は不安だったが、一応やってみることにした」(p.41)という検討→挑戦の形式を経て、やっている途中には、「面白いと思うと同時に『私にも、こういうエンジンのついている乗り物を運転することができるんだ…』と感動」(p.43)し、やり終えた後も仲間に「今日はクルーザーを運転できて面白かったよ。私も免許とろうかな」と言った(p.44)ことをここでは一例として挙げる。
- 6) たとえば、さくらが好きで何度も訪れているバリ島がテロに襲われたことを日本で知った際、息子と一緒にひどく動揺したということを描いた絵日記を挙げることができる(『ももこの21世紀日記 N' 05』2006, pp.122-123)。
- 7) 「サードエリア」はレイ・オルデンバーグのサードプレイス論(1989)に着想を得た友原の造語である。オルデンバーグはファーストプレイスを自宅、セカンドプレイスを職場や学校とした上で、自分が元気になる、人生を豊かにする場所としてサードプレイスを挙げた。これは馴染みの場所であり、たとえば行きつけのカフェや居酒屋、商店のちょっとした談話スペースなどが紹介されている。友原はこの論を援用し、「ファーストエリア」を自宅近辺、「セカンドエリア」を職場や学校近辺とし、「サードエリア」を繰り返し行く、自分が元気になる、人生を豊かにする地域と定義した。サードプレイス論では3つのプレイスすべてが同一の都市(圏)として論を組み立てられているが、「サードエリア論」はそうではない。特に「サードエリア」についてはグローバルな規模で存在するという立場を取

- る。注釈 2, 4, 6 で挙げたように、さくらが気に入り、何度も行っているバリはさくらの「サードエリア」だと言えよう。
- 8) 横幅はすべて使用。縦幅はページ全体の 15cm のうち、10.8cm を占めている。
 - 9) たとえば既述のバリや、チベットの仏教画といった伝統芸術に魅せられていることが挙げられる(チベットについては、『富士山 第⑤号』2003, pp.9-20)。
 - 10) この話での表記は「プサディ」で統一されている。なお、「まるちゃん 南の島へ行くの巻」においても、プサディーが書いた手紙のみにおいては「プサディ」となっていた。なお、本文では「プサディー」で統一する。
 16. 友原嘉彦(2017)「現代『女子』観光事情」、友原嘉彦編著『女性とツーリズム 観光を通して考える女性の人生』古今書院、pp.19-35
 17. 友原嘉彦(2015)「高学歴『アラサー』女性の観光」四日市大学総合政策学部論集、15 (1)、pp.51-65
 18. 信時哲郎(2019)『『りぼん』投稿時代のさくらももこ・矢沢あい・吉住渉』女子学研究、9、pp.17-31
 19. 水引貴子、歌川光一(2019)『『大野君と杉山君』をもう一度 さくらももこ氏の追悼に寄せて』敬心・研究ジャーナル、3 (1)、pp.63-65
 20. レイ・オルデンバーグ著、忠平美幸訳(2013)『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房

参考文献

1. 茨木博史(2017)「バリ／パリ・イメージの醸成 バリに渡った女性たち」、友原嘉彦編著『女性とツーリズム 観光を通して考える女性の人生』古今書院、pp.37-52
2. 齋藤朱莉、相尚寿、東秀紀(2017)「年代別と学生・会社員別にみる『女子旅』の実態と目的の把握」観光科学研究、10、pp.9-17
3. 斉木ゆかり(2019)「地域の偉人と『プロジェクトワーク』清水でさくらももこを探す」日本語教育方法研究会誌、25 (2)、pp.102-103
4. さくらももこ(2003)『さくらめーる』集英社
5. さくらももこ(2018)『ちびまる子ちゃん③』集英社
6. さくらももこ(2018)『ちびまる子ちゃん④』集英社
7. さくらももこ(2018)『ちびまる子ちゃん⑨』集英社
8. さくらももこ(2000)『富士山 第④号』新潮社
9. さくらももこ(2003)『富士山 第⑤号』新潮社
10. さくらももこ(2005)『ももこタイムス』集英社
11. さくらももこ(2006)『ももこの 21 世紀日記 N'05』幻冬舎
12. さくらももこ(2019)『焼きそばうえだ』集英社
13. 高田晴美(2017)「文学作品にみる旅＞ 男の旅と女の旅」、友原嘉彦編著『女性とツーリズム 観光を通して考える女性の人生』古今書院、pp.53-68
14. 高山陽子(2018)「女子旅におけるアジアの表象 台北・上海・香港の事例から」亜細亜大学国際関係紀要、27、pp.49-74
15. 友原嘉彦(2020)「偉人の世界観を活用した地域アイデンティティの創出と観光振興 さくらももこと静岡市を事例として」観光学術学会 2020 年度研究報告要旨集、pp.24-25

参考資料

1. 国立情報学研究所学術文献データベース CiNii Articles によるキーワード「多拠点生活」の検索結果 <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%A4%9A%E6%8B%A0%E7%82%B9%E7%94%9F%E6%B4%BB&range=0&count=200&sortorder=1&type=0> (2020 年 8 月 22 日参照)
2. amazon 検索エンジン結果「ちびまる子ちゃん全集 1990『まるちゃん南の島へ行く』の巻 [DVD]」 https://www.amazon.co.jp/%E3%81%A1%E3%81%B3%E3%81%BE%E3%82%8B%E5%AD%90%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93%E5%85%A8%E9%9B%861990-%EF%BD%A2%E3%81%BE%E3%82%8B%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93%E5%8D%97%E3%81%AE%E5%B3%B6%E3%81%B8%E8%A1%8C%E3%81%8F%EF%BD%A3%E3%81%AE%E5%B7%BB-DVD-TARACO/dp/B000H3M1UW/ref=sr_1_1?__mk_ja_JP=%E3%82%AB%E3%82%BF%E3%82%AB%E3%83%8A&dchild=1&keywords=%E3%81%BE%E3%82%8B%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93%E5%8D%97%E3%81%AE%E5%B3%B6%E3%81%B8%E8%A1%8C%E3%81%8F&qid=1596289544&sr=8-1 (2020 年 8 月 1 日参照)
3. BookLive! レビューサイト【感想・ネタバレ】ちびまる子ちゃん 6 のレビュー」 https://booklive.jp/review/list/title_id/221956/vol_no/006 (2020 年 8 月 1 日参照)
4. goo ブログ じゅくせんのつぶやき『『まるちゃん南の島へ行く』を見て涙』 <https://blog.goo.ne.jp/jukusenmasaya/e/8e3f1009a5768c01a06029640bf425b3> (掲載: 2018 年 8 月 28 日、参照: 2020 年 8 月 1 日)

Action and Capture for Tourism of a Female Creator : A Case Study of the Manga Series “Chibi-Maruko-Chan” by Momoko Sakura

Yoshihiko Tomohara *

<Abstract>

This paper discusses the action and capture for tourism of a female creator through the manga series “Chibi-Maruko-Chan” by Momoko Sakura. Maruko is a nickname from Sakura’s childhood. Sakura let Maruko travels on an island in Thailand in her Manga. This paper focused the travel’s evolution and showed Sakura’s behaviour and capture about her travels. The island was became important area for Maruko, and she thought that she wanted to go there any number of times in the future due to befriending a local girl, Pusadee. The island became, so to say, Maruko’s “Third Area”. The Travel’s first aim for Sakura showed the construction of this “Third Area”.

Keywords: female creator, tourism, Momoko Sakura, “Chibi-Maruko-Chan”, “Third Area”

* Department of Tourism, Faculty of Humanities, Seinan Jo Gakuin University

